

地理学評論原稿執筆要領（2020年8月）

本執筆要領は、特に明示しない限り地理学評論の論説に関するものである。このほか細部については、編集専門委員会（以下編集委員会という。）と著者との協議による。また、名簿発行後、改定もありうるので、投稿に際しては、ホームページで最新版を確認されたい。

1. 原稿の種類

- 1) 原稿の種類は、論説、総説、短報、資料、討論、書評およびフォーラムとする。
- 2) 論説は、その長短・形式にかかわらず、オリジナルな調査研究の成果とする。
- 3) 総説は、既存の研究成果の検討、研究史、研究動向、将来への展望などとする。
- 4) 短報は、論説または総説になり得る情報を含む速報や新しい手法の提案、新しい事実や掲載に値する知見などとする。
- 5) 資料は、調査・記録・統計などに基づいた、資料的に価値のある情報とする。
- 6) 討論は、地理学評論に掲載された論説等に対する批判・質問および著者からの反論・回答とする。
- 7) 書評は、文献の批評・紹介とする。
- 8) フォーラムは、地理学の振興などに関する意見・要望や研究グループなどの成果・動向・展望に関する議論とする。
- 9) 論説・総説・短報・資料は、編集委員以外の専門研究者を含む複数の読者による読後感に基づいて、編集委員会が掲載の可否を決定する。読後の手順については別に定める。
- 10) 書評・フォーラムは、編集委員会が掲載の可否を決定する。

2. 原稿の作成と提出

2.1. 原稿の作成

- 1) 本文などはA4判を縦に用いて天地各2.5cm、左右各5cm程度の余白をとり、文字サイズは11pt程度、23字×36行のレイアウトとする。
- 2) 図表などを含めた刷上がりページ数（1ページ当たりの印刷字数は最大で23字×72行）は、論説・総説では20ページ以内、短報では15ページ以内、資料では8ページ以内、討論では批判・質問および反論・回答がそれぞれ4ページ以内、書評・フォーラムでは2ページ以内とする。
- 3) 論説・総説・短報には摘要、英文要旨、および日本語・英語のキーワードを付ける。
- 4) 資料には、日本語・英語のキーワードを付ける。
- 5) 論説・総説・短報の原稿は、表題・目次、摘要、本文、謝辞、注、文献、英文要旨、英文要旨に対応する日本語要旨、表、図、図・表キャプションの順にまとめ、摘要から文献までは通しページを付ける。
- 6) 本文の原稿の右の余白に図表の位置を示す。
- 7) 本文などの原稿の左端に行番号を付ける。

2.2 原稿の提出

原稿は電子投稿を原則とし、学会ホームページに掲載されている電子投稿のためのポータルを利用し、電子投稿のマニュアルを熟読の上、所定の手続きに従って提出する。

2.3 電子投稿システム入力上の注意

- 1) 日本人などの著者名のローマ字表記では、OKUNO Takashiのように姓を先とし、姓はすべて大文字で記す。
- 2) 著者が大学院生の場合の所属は、「～大学大学院生」(英訳は Graduate student, ~Univ.) のように記す。

2.4 転載許可および著作権

投稿に際して、他の文献等から図・表、写真などの転載を行う場合、著作権に関する問題は著者の責任において、できれば投稿前に、遅くとも再投稿時までには解決しておく。そして、転載許可が得られた際には、転載許可書のコピー（電子媒体でも可）を速やかに本会事務局および地理学評論編集専門委員会に提出することとする。地理学評論に掲載された論文に起因して、第三者の著作権を侵害することとなり係争等が発生した場合、著者が責任を負って対処するものとし、本会は一切関与しない。

3. 表題

論文の内容を最も適切に要約したものとする。副題を付けることはなるべく避ける。

4. 摘要・キーワード

- 1) 摘要は400字以内とし、改行しない。図・表や特定の文献への直接的な言及は避ける。
- 2) 摘要および英文要旨の末尾にそれぞれ日本語、英語のキーワードを付す。キーワードは5個程度とし、論文の内容を的確に示す語を選ぶ。主として文献検索に利用されることを考慮して、著者の造語、一般性のない語、過度に長い複合的な語などは用いないようにする。

例 **キーワード**: ヒートアイランド, 都市化, 因子分析, GIS, 東京

Key words: heat island, urbanization, factor analysis, GIS, Tokyo

5. 本文

以下の各項目は、摘要や注などにも適宜準用する（5～8章の内容は「E-journal GEO (EJG) 執筆・作成要領（2020年8月）」の4～7章と同じである）。

5.1 文章表記の一般的原則

- 1) 章はI, II, ……., 節は1., 2., ……., 項は1), 2), ……とする。本文中では「IIIでは」「IIの1における」のように表記する。
- 2) 特殊な字体（イタリック、ボールド、ギリシャ文字など）は明瞭に区別できるようにする。
- 3) 算用数字や欧字などは半角とする。
- 4) 年次は西暦で表す。ただし、日本や中国などに関する歴史的記述などでは、必要に応じて1782(天明2年)のように年号を併記してもよい。「天明年間」「文化文政期」などのように年号による特定の時期の表現が必要な場合には、なるべく初出の際に、対応する西暦を括弧書きで付記する。その際、「1810年代」「19世紀初め」のような概略の表現でもよい。
- 5) 外国語文献からの直接引用は、日本語訳を原則とする。古い日本語文献からの直接引用は原典通りとするが、漢字はなるべく現行の日本語での一般的な字体を用いる。
- 6) 外国語（固有名詞を含む）の原語表記が必要な場合には、初出の場合にのみ、片仮名・訳語などの日本語表記の後に続けて併記し（括弧は不要）、以後は日本語表記とする。漢字・ラテン文字以外の特殊な文字はラテン文字化する。

5.2 送り仮名, 漢字と平仮名との使い分けなど

原則として、次の例および本執筆要領での用例に準拠する。

【 】は見出し(五十音順)を示す。斜線(/)で区切ったものは、同音異義の語句、紛らわしい語句、または許容範囲などであり、これらについては、適切な選択・使い分けや、同一論文内での統一に注意する。

()は使い方の例としての補足を示す。[]は意味・読み方を示す。

【ア】 あえて あげる／上げる／挙げる (1人)当たり (～に)あたる[相当・対処] (日が・壁に・予報が)当たる 当てる／充てる 後[アト] (～人)余り あまり～ではない 新たに あらためて 改める 表す／現す 表れる／現れる ある[或・在・有] あわせる／合わせる／併せる 【イ】 言い替える (～と)いう(例が) 言う (～と)いえる[推測・判断・可能・解釈] (～して)いく(傾向が) 行く／行った 意思／意志 いつ 一切 一層 いったん 一方 いまだ(に) 入江 いろいろ いわゆる 【ウ】 (～の)上では 伺う (意見を) うかがう 後ろ (～の)うち[内] 打切り 埋立て 埋立地 埋め立てる 売上 売上額 売り上げる 【エ】 (やむを)得ず 【オ】 大いに 大まかな おおむね おおよそ 置き換える (～して)おく (～を)置く 行う／行った おそらく 落ち着き 主に および 及ぶ お礼 卸売 【カ】 買占め 概して 買付け かえって (～に)かかわらず 関わる (管見の)限り (～でない・～する)限り 箇所 (4)カ所 (あり)方[カタ] (～のような・～という)かたちで 必ず 仮に 【キ】 聞取り 聞き取る (～に・～から・～して)きた 来た 切り替える きわめて 極める 【ク】 組合 組合せ 組み合わせる 組替え 組替人口 組み替える 組立て 組立工場 組み立てる 比べる (～に・～から・～して)くる 来る 【ケ】 けって 現に 【コ】 御[ゴ] ことに (～)ごとに ころ／頃 【サ】 さかのぼって さかのぼる／溯る 作付 作付面積 さまざま さらに さらなる 【シ】 塩漬け 仕組み 志向／指向 次第に 下請 従う したがって 実に 十分 しょせん 【ス】 ずいぶん (～に)すぎない (多)過ぎる (期限を)過ぎる すぐに すでに 【タ】 他[タ] たいして[大して] (～に)対して 対象／対照／対称 田植 確かだ 確かに ただし 直ちに たとえば たびたび (～する)たびに たぶん (～である・～する)ため 足りる だれ／誰 単に 【チ】 ちょうど 【ツ】 次いで ついに つくる／作る／造る 漬物 つねに 積込み 【テ】 手掛かり (～することが)できる 手続／手続き 【ト】 等[トウ] (次の)通り (～した)とき 特に (～してみた)ところ (住む)所 とどまる 止[ト]める (両者)とも (両者は)共に (～すると)ともに とらえる 取扱い 取扱量 取組み 取締役 取引 とる／取る／採る／捕る／執る／撮る 【ナ】 ない[無] なお 中[ナカ] 中でも 半ば なぜ (～)など なにとぞ 並[ナミ] 做う ならびに 並ぶ 並べ替える (そう)なる (～から)成る 【ニ】 (～し)にくい 【ノ】 後[ノチ] 延べ (～に)のぼる[達する] 上[ノボ]る 【ハ】 はからずも はかる／図る／計る／測る／諮る (～を)はじめ 初め 初めて はじめに[章タイトル] 始める はたして 果たす 【ヒ】 引上げ 引き上げる 引き伸ばす 【フ】 ふさわしい 再び 踏まえる 触れる 【ホ】 ほか 保証／保障／補償 (～)ほど ほとんど 【マ】 まさに まして (～にも)増して まず ますます また まだ 町並 全く 祭り (祇園)祭 まで 間に合う (～して)間もない まもなく まれ 【ミ】 見出す／見出だす (～から)みた／見た[観察・考察・対照] みなす (～して・～と)みる[試行・推測・判断] (～を)見る 【ム】 難しい 結びつく／結び付く むろん 【メ】 目指す めったに 【モ】 もちろん もつ／持つ もっとも[当然・ただし] 最も[最上級] もっぱら もと／下／基／元 もともと 最

寄りの 最寄品 盛土 もろもろ 【ヤ】 やめる 【ユ】 ゆえに (～して)ゆく 【ヨ】 (～して)よい
良い 要するに (～の)ように よく[詳しく・十分に・しばしば] よけいに 呼ぶ 読取り 読み取る
【ワ】 わかる/分かる 分かれる 別れる 枠組 (～する)わけではない 分ける わずか (～に)わた
って 割当て われわれ[我々]

5.3 常用漢字外の漢字

1) 常用漢字による代用・言替えが一般化している場合には、次の例のように常用漢字を用いる。

陰影 間欠 (灌木→) 低木 希少 希薄 漁労 掘削 係留 決壊 子牛 枯渴 混交 砂漠 散布
蒸留 侵食 浸透 州 生息 底引網 盾状地 鳥観 沈殿 (屠殺→) 畜殺 発酵 溶岩

2) 特定の作物・家畜・商品・専門用語などを示す場合や、常用漢字による代用・言替えが困難または不適当な場合には、次の例のように、常用漢字外でも本来の漢字を用いる。ただし「旱魃」は「干ばつ」でもよい。

隘路 暗渠 按分 隱喻 迂回 堰堤 花卉 家禽 崖 花崗岩 瓦 灌溉 柑橘類 旱魃 涵養 急峻 僅少 燻製 珪藻土 啓蒙 勾配 砂嘴 珊瑚礁 山麓 嗜好品 悉皆調査 褶曲 充填 趨勢 犁 鋤 裾野 遡及 堆積 溜池 湛水 稠密 潮汐 塵 汀線 伝播 洞窟 杜氏 島嶼 鍍金 糠剥落 播種 氾濫 肥沃 埠頭 分水嶺 僻地 編纂 變貌 萌芽 圃場 粃 湧水 稜線 輪廻 礫煉瓦

5.4 算用数字と漢数字との使い分け

原則として、次の例に準拠する。

1人当たり 一人っ子政策 一、二を争う 世界一 第一次産業 一次産品 二次加工 2次元 二分する 第二次世界大戦 第二種兼業 二重構造 第2に 第2次5カ年計画 二国間援助 第三世界 六大都市 三大都市圏 百万都市 四分位 千数百人 2万数千人 2万5000分の1 地形図/2.5万分の1 地形図 日系二世 ルイ14世 八代将軍吉宗

5.5 並列的表現

1) 単純な並列では、「および」「または」を用いる。2段階の列挙的な並列では、下位に「および」、上位に「ならびに」を用いる。2段階の選択的な並列では、下位に「もしくは」、上位に「または」を用いる。

2) 並列を意味する「・」は、「の」などを含む複合的な語句の並列には使わない。

例 小麦・大麦の栽培・酪農・羊の放牧 → 小麦・大麦の栽培，酪農，羊の放牧

3) 「たり」を用いる並列では、「～したり～したりする」のように表記する。

4) 「と」を用いる並列では、「～と～と」のようにする方が文意が明確になる。

5.6 外国地名

原語がラテン文字の地名については、初出のみ、原音に近い片仮名による日本語表記の後に続けて併記し(括弧は不要)、以後は日本語表記のみとする。ラテン文字以外の地名はラテン文字化し、ラテン文字の地名と同様の標記をする。ただし、慣用化した地名については、原語の併記は必ずしも要さない。漢字については初出のみ、原音に近い片仮名による日本語表記のルビをふる。その際、漢字はなるべく現行の日本語での一般的な字体を用いる。

例 ムンバイ Mumbai, ヴォルゴグラード Volgograd, モスクワ, ロサンゼルス, 重慶^{チョンチン}, 大連^{カーリエン}, 台中^{タイジョン}, 光州^{クワンジュ}

5.7. 動植物名

- 1) 動植物名は、原則として片仮名で表記する。ただし、家畜・作物などで、牛、豚、米、小麦のように漢字の使用が一般化している場合には、漢字で表記する。
- 2) 動植物の学名はイタリックで表記する。

5.8. 数量・数字・単位

- 1) 数量の表記では、「1万2000」または「12,000」のいずれかの方式を採用し、「1万2,000」のような両方式の混用はしない。
- 2) 分数は、「3分の2」または「 $2/3$ 」のように表記する。
- 3) 緯度・経度は、「北緯42度15分」または「 $42^{\circ}15'N$ 」のように表記する。
- 4) 二つの年次（年代）で期間を表すときには、「19」などを略さず、「1960～1980年」「1960年代～1980年代」のように表記する。ただし、図表では適宜簡略化してよい。
- 5) 精度・サンプル数や文章の趣旨を十分に考慮し、本文では不必要に細かな数値を用いない。特に表で詳細な数値が明示されている場合には、なるべく簡潔に表現する。また、「約」は、概数であることを特に強調する必要がある場合を除いて、みだりに用いないようにする。
- 6) 単位は、 km^2 、 $^{\circ}\text{C}$ 、%のような一般的な記号がある場合には、それらの記号を用いる。
- 7) メートル法以外の特殊な単位には、初出の際に括弧書きまたは注で説明（メートル法換算など）を付す。ただし、一般によく知られているもの（里、貫、石、町、反、マイル、バーレルなど）については、この限りではない。なお、ヤードポンド法の単位を米式以外で用いるときには、「英ガロン」のように明記する。
- 8) 「t」は、重量単位としてのメートルトンにのみ用いる。その他の米t（ショートトン）や船舶関係の各種のtなどは、そのつど「米t」「総t」のように明記する。
- 9) 人口は、前後関係で人口数であることが明白な場合には、「人口10万以上の都市」のように、原則として単位の「人」を省略する。

5.9. 数式

- 1) 数式は2行分以上取り、文字・数字・記号などの種類および大小や特殊な字体（イタリック、ボールド、ギリシャ文字など）を明瞭に区別できるようにする。
- 2) 各数式の後に、(1), (2), ……のように通し番号を付ける。
- 3) 一つの量は一つの文字で表す。
- 4) 数量・物理量を示す記号は、イタリックにする。数式の添字も数量・物理量あるいは番号に対応する場合には、イタリックにする。ただし、添字が言葉の意味を示す場合（gasのg, normalのn, relativeのr, electricのeなど）には、立体にする。
- 5) ベクトルはイタリックボールドとする。

5.10. その他の留意事項

- 1) 直接引用には「」を用いる。本文などで直接言及する書名には『』（欧文はイタリック）、論文名には「」（欧文は“”）を用いる。
- 2) 本文中でカギ括弧を用いて引用し、さらに文章が続く場合は、閉じた括弧の前に句点を付さない。ま

た、末尾になる場合は、閉じた括弧の後に句点をうつ。

- 3) 難読語句・難読地名は、本文の初出の際にルビを付す。摘要や図表ではルビは付さない。
- 4) 「～であるが、」のような場合の「が」は、逆接的用法のみに用いる。
- 5) 外国語の片仮名表記では、人名の姓と名とを区別するような場合を除いて、みだりに「・」で分割しないようにする。複合的な姓を区切る必要があるときには、「フィッシャー＝ディスカウ」のように「＝」を用いる。
- 6) 「より」は、「～より多い」「～より～の方が」のように比較の場合のみに用いる。起点・出所・根拠などには、「～から～まで」「～により作成」「～から作成」のように、「から」や「により」などを用いる。
- 7) 「割合」は、「(総人口に占める) 男性の割合」のように、合計して 100%になる場合での特定部分の構成比を示す場合に用いる。「比率」は、「(女性に対する) 男性の比率」のように、それ以外の場合に用いる。
- 8) 文章表現は、「分析を行う」→「分析する」のように、なるべく簡潔・明快にする。
- 9) 「我が国」という表現は避け、より客観的・地理的な領域を示す表現としての「日本」を用いるようにする。
- 10) 「筆者」という表現は、原稿の著者自身（一人称）を指す場合のみに用いる。
- 11) 機関名のうち、よく知られていて混同の恐れがないものは、正式名称にはこだわらずに、「～省」などを省略した実質的な機関名を用いてよい。

例 アジア経済研究所 国土地理院 国立国会図書館 社会保障・人口問題研究所 産業技術総合研究所 統計局 農業環境技術研究所

6. 謝辞, 研究費, 発表集會名

謝辞は、調査対象地域での協力者への謝辞など、対外的なものを優先する。科学研究費補助金などを使用した場合には、その年度、種類、題目、代表者、課題番号などを記す。また、当該研究を発表した研究集會名とその年月を記す。

7. 注

注は、本文の記述を簡潔にするために、本文の内容に密接に関連してそれを補足する必要がある場合に限って用いる。本文中の当該箇所の上肩に右片括弧付きで通し番号を付し、本文（謝辞）の後にまとめて、番号を付して注の内容を記す。

8. 文献表と文献引用

以下の各項目は、日本語文献、中国語文献、韓国（朝鮮）語文献、欧語（ラテン文字）文献に関する一般的な記述である。その他の言語・文字（ロシア語など）による文献は、ラテン文字化し、欧語文献として扱う。

8.1. 文献表の配列

- 1) 日本語文献、中国語文献、韓国（朝鮮）語文献、欧語文献の順に並べる。
- 2) 日本語文献は、著者名の五十音順に並べる。中国語文献および韓国（朝鮮）語文献は、それぞれ著者名の当該言語の固有の配列順（あるいは片仮名表記の五十音順）に並べる。欧語文献は、著者名（姓が

先) のアルファベット順に並べる。

- 3) 同じ著者の文献は発表年の順に並べる。同じ発表年のものが複数ある場合には、引用順に a, b, …… を付して並べる。
- 4) 筆頭著者が同じである連名著者の文献の場合には、著者数の少ない順に並べる。著者数が同じ場合には、第2著者(以下)の五十音順(アルファベット順)に並べる。著者が3人以上でも全著者名を列記する。

8.2. 文献表の表記

- 1) 日本語文献、中国語文献、韓国(朝鮮)語文献の著者名(漢字)はフルネームとし、欧語文献の著者名は、姓以外はイニシャルのみとする。なお、著者の姓と名との区別ができないなどの場合には、著者との協議により、編集委員会が判断する。
- 2) 欧語の単行書名・雑誌名はイタリックとする。欧語の論文名・単行書名は、固有名詞などを除いて表題(コロン後の副題も含む)の最初の1文字のみを大文字とする。欧語の雑誌名は各語大文字+小文字とする。
- 3) 文献の著者名、表題や雑誌名などは原典通りとする。ただし、欧語の雑誌名の冒頭の定冠詞は省略する。ラテン文字以外の文献については、可能な限りラテン文字化し、末尾に原典の原語名を括弧で付記し、さらに原語表記による文献を併記する。また、中国語・韓国(朝鮮)語文献では、なるべく現行の日本語の一般的な漢字字体を用い、韓国(朝鮮)語文献におけるハングルの部分は、原語に最も近い日本語の漢字または片仮名表記に置き換え、末尾に(中国語)、(韓国語)または(朝鮮語)と付記し、さらに原語による文献を併記する。古い日本語文献の漢字は、現行の日本語の一般的な字体を用いるが、表題における歴史的仮名遣いや片仮名表記などは原題通りとする。
- 4) 日本語、中国語、韓国(朝鮮)語の雑誌名は原則として略記しない。欧語の雑誌名を略記する場合には、正式な略記法に従い、過度の略記は避ける。特に、略記が一般化していない場合、正式な略記法が不明の場合、他誌と混同しやすい場合、本誌での引用例が少ない場合には、略記しないようにする。
- 5) 同名または類似名の雑誌があつて紛らわしい場合、本誌での引用例が少ない場合などには、必要に応じて、発行地または発行機関名などを括弧書きで付す。
- 6) 巻と号のある雑誌では、巻ごとに通しページがある場合には号数を省略する。号ごとにページが改まる場合には、巻数の後に号数を丸括弧に入れて、3(4)のように書く。巻がなく号のみの場合には、号を巻に準じて示す。なお、巻(号)数の表記は、原典がローマ数字や漢数字などの場合でも、算用数字に統一する。また、地理学評論の57~74巻と82巻以降については、57Aまたは57Bのように、A、Bを区別する。
- 7) 雑誌論文あるいは論文集掲載論文の場合には、論文の最初と最後のページを示す。単行書の総ページ数を記す必要はない。引用ページの明記が必要な場合は、本文中の当該文献を引用する際に行う。
- 8) 出版地が複数のときは最初の一つだけでよい。
- 9) 訳書を引用した場合には、下記の文献表の例に倣い、訳書の記述の後に、原著に関する情報を併記する。原著を引用した場合で、訳書も示す場合には、原著の後に併記する。
- 10) 再版、復刻版などの場合には、原則として実際に引用した文献について記し、必要に応じて初版など

に関する情報を付記する。ただし、完全な復刻版の場合で、本文の記述の上で特に必要であれば、原著について記し、復刻版に関する情報を付記する。

- 11) 官公庁発行の白書、報告書等の刊行物については、発行元を省略することができる。
- 12) 英語以外の文献名・雑誌名は、検索可能な公式英訳がある場合には英訳のみとする。公式英訳がない場合には原語（たとえば日本語のローマ字表記）のみとするが、英訳を原語の後に括弧書きで付してもよい。
- 13) 紛らわしい雑誌名には、発行地、発行機関、または原語タイトルなどを括弧書きで付す。
- 14) 更新日付が明らかでないウェブサイトを引用する場合には、最終閲覧日の年を発表年としてよい。

8.3. 文献表の例

文 献

- 猪木幸男・黒田和男 1965. 5万分の1地質図「大江山」および説明書. 地質調査所.
- 宝田晋治・村岡洋文 2004. 八甲田山地域の地質. 地域地質調査報告 (5万分の1地質図幅), 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 上原秀明 1999. 織田武雄著『古地図の博物誌』(書評) 地理学評論 72A: 457-460.
- 漆原和子 1990. 石灰岩地域の土壌. 浅海重夫編『土壌地理学—その基本概念と応用』177-185. 古今書院.
- 太田陽子・寒川 旭 1984. 鈴鹿山脈東麓地域の変位地形と第四紀地殻変動. 地理学評論 57A: 237-262.
- 金子いずみ 2008. 集落営農の労働力構成. 農政調査委員会編『日本の農業 あすへの歩み 238』1-133. 農政調査委員会.
- 高阪宏行 2000. 『地理情報科学ハンドブック』朝倉書店 (出版予定).
- 後藤忠志 1993. 大雪山・北八甲田山における登山道の侵食. 北海道大学大学院環境科学研究科修士論文.
- スミス, D.M. 著, 竹内啓一監訳 1985. 『不平等の地理学—みどりこきははずこ』古今書院. Smith, D. M. 1979. *Where the grass is greener: Living in an unequal world*. London: Penguin Books.
- 高橋 誠 1987. Gilg, A.: *An introduction to rural geography*. (書評) 地理学評論 60A: 407-408.
- 富田和暁 2004. 三大都市圏における地域変容. 杉浦芳夫編『シリーズ〈人文地理学〉6 空間の経済地理』80-105. 朝倉書店.
- 中道圭一・森山昭雄 2005. 三河山地西縁花崗岩丘陵地における二次林植生. <http://www2.rak-rak.ne.jp/D0AB3812/study/mikawaforest.htm> (最終閲覧日: 2006年4月11日)
- 内閣府 2011. 『高齢社会白書 平成23年版』
- 日本火山学会編 1984. 『空中写真による日本の火山地形』東京大学出版会.
- 藤野 毅・浅枝 隆・和氣亜紀夫 1996. 夏季の都心部周辺における気温分布特性に関する数値実験. 地理学評論 69A: 817-831.
- 前島郁雄・田上善夫 1990. 19世紀初頭の日本の気候—1816年を中心に. 前島郁雄編『江戸時代の日記の天気記録による気圧配置型の復元』(昭和62年度～平成元年度科学研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書) 82-96. 東京都立大学理学部地理学科.
- 牧村 顕 1995. 地方自治体からの情報発信. http://www.dl.mlis.ac.jp/Djournal/No_4/ (最終閲覧日: 2006年4月11日)

- 村山祐司・柴崎亮介編 2008. 『シリーズ GIS 1 GIS の理論』朝倉書店.
- 森川 洋 1990a. 『都市化と都市システム』大明堂.
- 森川 洋 1990b. 広域市町村圏と地域的都市システムの関係. 地理学評論 63A: 356-377.
- 矢ヶ崎典隆・斎藤 功・菅野峰明編著 2003. 『アメリカ大平原——食糧基地の形成と持続性』(日本地理学会海外地域研究叢書 3) 古今書院.
- 柳田國男 1969 [1929]. 都市と農村. 柳田國男『定本 柳田國男集 16』237-391. 筑摩書房.
- 渡邊真紀子 1987. 男体山東麓域における土壤腐食特性の垂直分布と水平分布. 地理学評論 60A: 251-264.
- 全 偶容 2007. 韓末・日帝初ソウルの都市行商 (1897~1919). ソウル学研究 29: 153-187. (韓国語) 전우용 2007. 한말·일제초 서울의 도시행상 (1897~1919). 서울학연구 29: 153-187.
- Christaller, W. 1933. *Die zentralen Orte in Süddeutschland*. Jena: Fischer. Translated by C. W. Baskin 1966. *Central places in Southern Germany*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Cooper, M. 1996. Harley-riding, picket-walking socialism haunts Decatur. *Nation* April 8: 21-25.
- Dennis, R. 1989. Dismantling the barriers: Past and present in urban Britain. In *Horizons in human geography*, ed. D. Gregory and R. Walford, 194-216. London: Macmillan.
- Ferguson, G. and Woodbury, A. D. 2007. Urban heat island in the subsurface. *Geophysical Research Letters* 34: L23713, DOI: 10.1029/2007GL032324.
- Griffith, D., Doyle, P. and Wheeler, D. 1997. A GIS and spatial statistical analysis of urban childhood lead pollution exposure. In *Conference proceedings and program*, First Syracuse Regional Lead Conference. ed. A. Hunt, 13-16. Syracuse: SUNY Health Science Center.
- Harris, C. D. and Ullman, E. L. 1941. A theory of location for cities. *American Journal of Sociology* 46: 853-864. Reprinted in Mayer, H. and Kohn, C. eds. 1959. *Reader in urban geography*, 202-209. Chicago: University of Chicago Press.
- Johnston, R. J., Gregory, D. and Smith, D. M. eds. 1994. *The dictionary of human geography*, 3rd ed. Oxford: Blackwell Publishers.
- Krim, A. J. 1967. *The innovation and diffusion of the street railway in North America*. Master's thesis, Department of Geography, University of Chicago.
- Morin, K. 1996. *Gender, imperialism and the Western American landscapes of Victorian women travelers, 1874-1897*. Ph. D. dissertation, Department of Geography, University of Nebraska.
- Okazaki, S. and Sunamura, T. 1994. Quantitative predictions for the position and height of berms. *Geographical Review of Japan* 67B: 101-116.
- Richter, M. 1996. Klimatologische und pflanzenmorphologische Vertikalgradienten in Hochgebirgen. *Erdkunde* 50: 205-237.
- Smith, D. M. 1979. *Where the grass is greener: Living in an unequal world*. London: Penguin Books. 스ミス, D. M. 著, 竹内啓一監訳 1985. 『不平等の地理学——みどりこきはいずこ』古今書院.
- Stanislawski, D. 1974. Review of *Topophilia: A study of environmental perception, attitude and values* by Yi-Fu Tuan. *Professional Geographer* 24: 456-457.

Trimble, S. W. and Lund, S. W. 1982. *Soil conservation and the reduction of erosion and sedimentation in the Coon Creek Basin, Wisconsin*. U. S. Geological Survey Professional Paper 1234. Washington: U. S. Government Printing Office.

United Nations Educational Science and Cultural Organization (UNESCO). International Hydrological Programme (IHP). <http://www.unesco.org/water/ihp/index.shtml> (last accessed 15 May 2006)

Wade, R. 1999. The Asian debt-and-development crisis of 1997—? Causes and consequences. *World Development* 27 (forth coming). Also at <http://epn.org/sage/asia698.html> (last accessed 15 May 2006)

8.4. 本文などでの文献引用

次の例に準拠して、著者の姓（紛らわしい場合には名も併記）と発表年を示す。著者が3人以上の場合には、筆頭著者の姓に、「ほか」または et al. を付す。直接引用の場合には該当するページを明記する。また、直接引用以外でも、必要に応じてなるべく関連ページを示す。特に単行書の場合、実際に該当するページを特定できるときには、その範囲を明示することが望ましい。

日本火山学会（1984）は....., 森川（1990a: 182-192, 1990b）は....., 米倉（1977, 1978a, b）は....., 高阪（2000: 50, 61-62）は....., 太田・寒川（1984）は....., Okazaki and Sunamura（1994）は....., 藤野ほか（1996）は....., Johnston et al.（1994: 136-138）によれば....., これらの研究（渡邊 1987; 漆原 1990）は.....,である（スミス 1985: 27）,という見方もある（Dennis 1989; Richter 1996）。

8.5. 文献表にあげることができないもの

- 1) 年鑑、統計書、新聞記事、古文書、地図（説明書付きの地図、地図集は除く）、私信などの史資料は、本文、注、図・表の脚注のいずれかにおいて、編者、発行年次、発行機関、所蔵先などの書誌情報のうち、必要と思われるものを記す。ただし、論文に準じた新聞記事で、著者名、表題、ページ数が特定できるものは、文献表にあげることができる。
- 2) 研究会などでの口頭発表で、要旨が印刷物として刊行されていないものは、発表者名、題目、集會名、開催年次などを注で記す。

9. 英文要旨

- 1) 天地左右 3cm の余白と行間の余裕を十分に取って、20～25 行程度でプリントする。
- 2) なるべく刷上がり 1 ページ（約 500 語）以内とする。
- 3) 英文表記については *Geographical Review of Japan Series B* 執筆要領に準拠する。
- 4) 図・表や特定の文献への直接的な言及はなるべく避ける。
- 5) 対応する日本語の要旨を添付する。
- 6) 信頼できる英語文献での実例を参考にして、日本語からの単純な直訳による不自然な英文にならないように注意するとともに、適当な人の校閲を受けるように努める。

10. 図・表

10.1. 共通事項

- 1) 各図、各表ごとに別紙とする。
- 2) 左右の幅の取り方は、本文の文字の組み方に対応して 1 段分か 2 段分かの 2 種類しかないことに留意する。

- 3) 図・表ごとに、図1、表1のようにそれぞれ通し番号を付ける。一つの図・表が複数の部分に分かれる場合にはa、b、……を付し、本文では図1-aのように言及する。
- 4) 写真は、図として扱う。ただし、特に必要な場合や、写真が多い場合には、写真1、写真2のように、図とは別に扱ってもよい。
- 5) 図の原稿には、1枚ごとに番号と著者名を余白に付す。表の原稿には、1枚ごとに番号、表題、説明文・注、出所を記し、著者名を余白に付す。さらに、図・表ともに、番号、表題、説明文・注、出所などを別紙にまとめる。
- 6) 日本語の表題とともに英語の表題を併記する。英文表記については *Geographical Review of Japan Series B* 執筆要領に準拠する。英語による説明文・注などを併記してもよいが、なるべく最小限にとどめる。なお、図・表の本体でも英語表記が必要な場合には、日本語と英語との併記を避け、英語表記のみとする方が望ましい。

10.2. 図の作成

- 1) 図の原稿は、版下原稿をプリントできるファイルを提出する。後者の場合は、使用する描画ソフトの種類等について、原稿受理決定後に調製を求めることがある。
- 2) 刷上がりの幅は、1段分ならば5~6.4cm、2段分ならば10~13.5cmが標準である。天地は、表題、説明文・注などを含めて、20cmが最大である。
- 3) 緯度・経度が図示されていない地図には原則として縮尺と方位を付ける。ただし、小縮尺の地図の場合で、図法などの事情により縮尺や方位を単純に示すことが現実的でないなどの場合には、これらを省略してよい。
- 4) 図中の文字・数字の大きさや図の表現の細かさについては、縮小率を十分に考慮して定める。図中の文字などの刷上がりの大きさ（横幅）は、欧字・数字・記号は1mm以上、漢字は2mm以上になるようにする。描画ソフトを用いて図の原稿を作成する際には、白黒印刷を念頭にハッチングの濃淡や凡例の種類等に留意する。

10.3. 表の作成

- 1) 表の原稿は、そのまま印刷できる版下原稿として作成する必要はない。ただし、やむを得ず複雑な表になる場合や、流れ図のような不規則な斜線のあるものは、たとえ数字・文字が大部分でも、なるべく図に準じて版下原稿を作成する。なお、表は表計算ソフトで作成するのが望ましく、画像としては提出しない。
- 2) 統計数値は、精度や単位などを十分に考慮して、簡潔に表現する。数値が4桁以上になる場合には、3桁区切りのコンマを用いる。ただし単位は、1000人、千人のように表記する。

11. 書評

- 1) 原著者名・訳者名は、フルネームで示す。
- 2) 図・写真・表の枚数を特に示したいときには、本文中で言及する。
- 3) 価格は本体価格で示す。税込みの場合にはその旨を明記する。
- 4) 目次のための原稿を日本語および英語で別紙に記す。和文目次での片仮名表記の著者名や英文目次での著者名・評者名は、姓以外はイニシャルのみとする。英文目次では、英語以外の欧語文献（必要に応

じてラテン文字化したものを含む) は英訳する必要はない。

5) 文献表記の例

荒牧重雄・白尾元理・長岡正利編：空からみる世界の火山. 丸善, 1995年, 207p., 13,000円.

M. モリッシュ著, 保科秀明訳：第三世界の開発問題 (改訂版). 古今書院, 1993年, 264p., 3,000円.

Colin K. Ballantyne and Charles Harris: The Periglaciation of Great Britain. Cambridge: Cambridge University Press, 1994, 330p., £50.00

[和文目次原稿]

荒牧重雄・白尾元理・長岡正利編：空からみる世界の火山 (鈴木毅彦)

M. モリッシュ著, 保科秀明訳：第三世界の開発問題 (改訂版) (小泉武栄)

C. K. バランタイン・C. ハリス：イギリスの周氷河作用 (松岡憲知)

[英文目次原稿]

Aramaki, S., Shirao, M. and Nagaoka, M. eds.: Volcanos of the World (Suzuki, T.)

M. Morrish: Development in the Third World (Translated by Hoshina, H.) (Koizumi, T.)

C. K. Ballantyne and C. Harris: The Periglaciation of Great Britain (Matsuoka, N.)